

## 人参養栄湯を使いこなす ③

# ～そもそもなぜ人参 「養栄」湯ではないのか～



入江漢方内科クリニック吉祥寺 入江 祥史

筆者がこの処方を知ったのは割と早い時期で、漢方を専門的にやる前のことであつた。上級医が(おそらく深い考えもなく)入院患者によく人参養栄湯を処方していたのだが、そのときに思ったのが「何で『養栄』湯なんやろ?『養栄』のほうが普通やろ?」ということである。

養栄は、以前は「營養」と表記されることも多かったようで、20世紀になって栄養学の創始者・佐伯矩氏が「養栄」と表記し、今はこれに統一されている。「栄え、養う」という意味が込められているとか。

しかし、人参養栄湯の養栄はそういう意味ではない。漢文式に読めば「栄を養う」のである。漢方の古い本では「栄」を「營」とも書くから、人参養栄湯は本来「營を養う」湯(スープ)だったのである。

では、營とは何か。これは衛と並べて「營衛」と使うことが多いが、「衛」は防衛・衛星など、外から敵を防ぎ内を守ることであり、「營」は経営とか営倉などの營で「内側にある大事なもの(お金や食糧)」のことである。

漢方で言えば、衛は気であり營は血である。気が体表を巡ることで、病原の侵入を防ぎ、体表を温め、手足を動かし、発汗過多を抑え、止血する。血は体内にあって、身体各部へ栄養分を届け、筋骨を作って維持したりする。これらをまとめて「衛気營血」とも言ったりする。

さて、人参養栄湯の成分には、血をつくる成分(当帰・芍薬・地黄)が含まれていたが、これが營(營血)

を養う、つくる、増やすのであるから、「營を養う」→「栄を養う」→「養栄」でよいわけだ。頭に「人参」が付いているのは、“人参が入った養栄目的のスープです”という意味であり、人参は言わずと知れた補気薬の王様のようなものだから、人参養栄湯が補気作用をも持つことを端的に表現しているのだ。

「ならば、十全大補湯だって補気・補血ともやるから、十全大補湯こそ人参養栄湯と呼べるんじゃないか?」という意見も出るだろう。確かにそうだが、それだといまの人参養栄湯の名前は何とする?十全大補湯は、気も血も十分に補う気血双補の王道をいく処方だが、人参養栄湯は補気もたしかにやるけれども、補血(=養栄)が中心なのだ。人参養栄湯は、十全大補湯の補血力を増し、さらに本連載の前回述べたように五味子・陳皮・遠志を加えた「十全大補湯のバリエーションのひとつ」なのだ。

本連載の初回に、人参養栄湯は高齢者の長期にわたる冷え、疲労によいと書いたが、**高齢者は陰血**(⇔対になるのは「陽気」)が不足しており、このために体が乾燥してきて“枯れて”いくのである。これを治すには補陰(補血)が適当だということになる。血は筋を養うので、人参養栄湯は高齢者の筋肉量低下→フレイルにいかにも良さそうだ。

次回は最終回だが、十全大補湯以外によく問題になる処方との使い分けについて検討する。

(次号へ続く)